第2回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー　概要報告

大西　浩明

◇日　時　　2025 年 7 月 19 日（土）10：00～12：00
◇場　所　　県立万葉文化館
◇参加者　　【学生】東（教職大学院）、田中、勝田
【現職教員】平井（大三輪中学校）
【万葉文化館】井上、中本、榎戸
【大学教員】加藤、米田、大西　　計１０名

◇内　容　　館内見学、万葉集に関する情報提供
中本主任研究員、榎戸研究員から説明をいただきながら館内を案内していただいた。

エントランスの大型ビジョンが開館以来のリニューアルを終え、万葉文化館の案内や万葉集に関する基礎的な情報が精細な画面で分かりやすく紹介されていた。

飛鳥池工房遺跡の説明を受ける→

館内のいくつかの箇所に AR Point が設けられ、QR コードを読み込み対象の展示物にカメラを向けると、キャラクターが登場して説明をしてくれたり、関連する情報へアクセスしたりできるようになった。

飛鳥池工房遺跡は飛鳥時代の大規模な工房跡で、ここでは鉄製品や金・銀、銅製品、ガラス玉など様々なものが作られていた。また、最古の鋳造銭である富本銭が大量に作られていたことが調査から分かっている。ここで作られた製品は、寺院や皇族などに提供されていたようである。

この遺跡からは、木簡が 8000 点以上見つかっており、「天皇」と書いた最古の木簡や、万葉集にもその名が見える大伯皇女（おおくのひめみこ）の木簡が注目される。

井上企画・研究係長より、万葉集に関する基礎的な情報や授業で活用する際のポイントなどをお話しいただいた。

・万葉集は国語だけでなく、いろんな教科・活動で活用してほしい。
・万葉集は、都に限らず日本各地の地名が詠まれているので、日本中どこの学校においても授業化できる。
・奈良では当たり前の風景でも、他地域の人からすれば、それが 1300 年経ってもあることの感動が得られる。
　→導入で地元に万葉集の歌がないか調べる活動
　　当時の人の「感じ方」を大事にして、万葉集が身近に感じられるようにしたい。
・国語の教科書やこれまでの学校教育では、古典における文法を学ぶことが中心だったが、それだけでは退屈な授業になってしまう。「読み手の心情に寄り添うために学ぶ文法」でありたい。

あをによし　寧楽の京師は　咲く花の　薫ふがごとく　今盛りなり　（小野老）

　都人である作者が、はるか遠い都を懐かしんで太宰府の地で詠んでいる。
　「今盛りなり」の「なり」と断定している表現はなぜか？
　「けり」ではなく「なり」と断定することの効果は？
　万葉の時代、「にほふ」は鼻で感じる香りだけでなく、目で見て感じる色合いを含む言葉。
　花は、いわば植物の生命力があふれ、内面から輝くという意味の表現と見られる。
　「今盛りなり」と都の繁栄を讃える言葉には、そんな都に早く戻りたいという思いが読み取れる。
・歴史と文学の融合という視点が大事である。
　白村江の戦いに大敗し、唐・新羅からの防衛対策として防人が必要となる。
　→　東国から遠く離れた九州の守備にあたった防人の歌が多く収められている。
　大陸や朝鮮半島との交流の歴史から、多言語・多文化の社会があったのではないか。
　→　万葉集には 145 首も遣新羅使に関連する歌がある。
　　国語と社会科のカリキュラムマネジメント
・万葉仮名クイズ
　　表音文字･･･伎弥乎麻都　「君を待つ」
　　表意文字･･･寒過暖来良思「冬過ぎて春来たるらし」　寒「冬」　暖「春」
　　丸雪降　「あられ降り」　形状を表した
　　戯書･･･山上復有山　「いで」（出）　山の上に復た山有り　あえて 5 文字で表現（文字の分解）
・浦島太郎伝説
　日本書紀に「水江浦島子」の話があり、それをもとに詠まれたと考えられる歌が万葉集にある。
　「浦島子歌」　水江の浦島の子を詠める一首　併せて短歌（巻 9・1740）